

豊かな自然環境を大切に 安全とおいしさを求めて

庄内協同ファームだより

2019年 No.177

発行

農事組合法人 庄内協同ファーム

〒999-7631 山形県鶴岡市八色木字西野338

TEL.0235-78-2120 FAX.0235-78-2140

<http://www.shonaifarm.com>



苗箱から出された稲の苗。根もギッシリで準備万端！



始まりの知らせ

冬が過ぎ 春の訪れ

この時が来るのを待っていた

種を播いたらヨイドン

稲は精一杯生きようとする

ここからは人と稲の

真剣勝負？ 協同作業？

急がしくも充実した

お米作りが今年も始まった

収穫の秋まで どうぞよろしく

継ぐ技つなぐバ

對馬さんが有機農業を勉強するために、志藤さんの研修生となつてこの春一年を迎えます。今春からは、農家一年生として自立の第一歩を迎える對馬さんと、彼を見守る志藤さんからお話を伺いました。

志藤さんが目指した 農業のかたち

農家の長男として、自分がやるべき仕事は農業だ！と何の違和感もなくスタートした志藤さんの農業人生。「米作りは面白かったからのう」25年前に自然農業と出会い、勉強や実践を通して益々農業の魅力にのめり込んでいきました。同じ目標を持つ庄内協同ファームの仲間と共に、有機農業の技術や販路開拓に奔走し、2003年から6年間は、庄内協同ファームの代表としても活躍しました。その頃に考えていたことは、若い頃は個人の自立や自己の有機農業技術を高めることに目が向いていたけれども、法人の代表という役割を通して、この経験とノウハウの蓄積を社会にどう返していけるのか？と考えるようになっていたそうです。農を

農を大切

にできなければ、

地域を守るこ

とは出来な

いと感じた

志藤さん。有

機農業を通し

て、社会の在り方を変えていき

たい！と考え、「農を変えたい

東北集会」への参加、「有機農

業推進協議会」の発足、「田ん

ぼの生き物調査」の実践と、次

々に行動に移していきました。

インドまで農業技術を教えるた

めに出向いた時もあり、自宅に

は、有機農業を学びたい研修生

の為の宿泊施設も整え、県外や

海外からの研修生が毎年志藤家



「米作りは人生そのもの」と語る志藤正一さん（右）と、「人をつなぐ『お米作り』」を目指す對馬（つしま）啓太さん（左）

に訪れます。

世代交代の時期を迎え、息子さんたちが農家を継ぐと言ってくれるのを待っていました。子供たちも頑張っている仕事があるし、それぞれの人生だからと継いでもらうことは諦めました。それでも、積み重ねてきた有機農業の経験を次の世代に伝えたい！そんな思いでいた頃に出会ったのが、對馬さんでした。

非農家から 農家を目指す

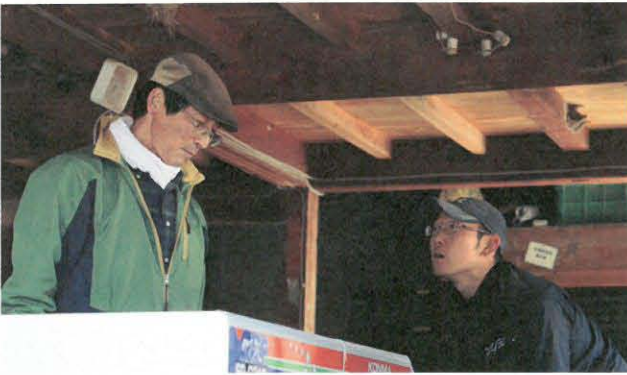
全くの非農家で育った對馬さんが、有機農業に興味を持ったのは、大学の農学部でゼミで水稻の有機栽培を学んだことがきっかけでした。大学卒業後は、宮城県の農業法人で5年間経験を積みます。その間に、志藤さんの田んぼを何年か調査していた大学時代の指導教官と鶴岡を訪れ、志藤さん宅で庄内協同ファームの組合員と交流しました。この時は、まさか数年後の研修先になるとは思ってもいなかったそうです。

農業法人で働く中で感じたのは、生きる上で子育てや食べ物がとても大切だということ、これからの農業が元気になるには、小さくても個

人の農家が増えることが大事だと感じ、自分も独立した農家になることを決意します。ちょうどその頃、志藤さんから「うちで有機農業をしないか」と声を掛けていただき、2018年3月から鶴岡に移住して農業研修をスタートさせました。今は、庄内協同ファームの青年部にも加入し、仲間づくりや様々な役割も担っています。

1年間研修してみても互いの思いは…

「まだ分からないことだらけで…」と



語る對馬さん。農作業の段取りがまだ分からなくて、先が読めなくて不安があるそう。「がむしゃらに体を動かしているつもりだが、志藤さんの指導は正直手厳しい…」と感じる時もあります。時に心が折れそうになつて、かさぶたが張つて、また頑張つて…。今年はずっと段取りよくやっけていきたいです。自分が見えていなかった作業を、志藤さんがやってくれていたんだと気が付く、見える自分になりたいたい」この言葉を受けて「分からない気持ちを、素直に隠さず話してくれる對馬くんの人柄に寄り添つて、その気持ちに応えていきたい。その為には、伝える側が真剣に勉強



苗箱が並ぶハウスで笑う對馬さんご夫妻

していなくては」と語る志藤さん。

未来の夢とエールを！

今年は、大学時代の後輩だった奥様とご結婚されて、夫婦で農家一年生をスタートします。初めてだらけの生活と仕事は、不安と期待が入り混じっていますが、ゆくゆくは自分のような農家になりたい研修生を受け入れて、3家族ぐらいで協力しあえるグループを作り、仕事も幸せもシェアしていけたらと夢は膨らみます。

「非農家であることのデメリットはもちろんあるが、1つずつ努力して、体も、頭も、口も動かして、一歩ず

つ自立した農家になっていってほしい」と志藤さんはエールを送ります。「生活と仕事と、すべてを引き受けていただいて本当に感謝しています。早く一人前になって志藤さんを安心、楽させてあげたい。血は繋がっていないけれど、志藤さんの志を引き継いで頑張りたい」そう語る對馬さんの誠実な想いが、志藤さんの愛情に包まれて、今、庄内の地に根を張ろうとしています。

ファームの活動記録

福島視察レポ
～2019年1月～

文：高橋 直之

生協理事、職員さん、組合員の方々と意見交換会を行いました。私共は、東北の仲間として何か出来ないかと思い活動し、また外に向けては忘れてほしくないものだと思っていましたが、様々な状況を聞いていく中、組合員の方からは封印したい、話すと辛い思いが…という声を聞くと私も大変辛い思いになりました。

胸に刺さる思いで、申し訳ない気持ちになる視察をお願いしたのではないかと感じる事がたくさんありました。

memo

あいコープふくしま

福島県郡山市を拠点とする生活協同組合。庄内協同ファームとの取り引き当初から産地交流を行っている。2011年の震災後から、毎年冬に福島での「もちつき交流会」、夏に庄内での「庄内浜ツアー」を開催し親交を深めている。

生産者集会
～2019年3月～

文：對馬 啓太

今年の生産者集会で特に印象的だったのは、天候不順による収穫量不足でお米が不足していることと、今年度は組合員の減少により水稲作付面積も減るということです。年齢による体力の問題で有機栽培を断念したり、若くても農地拡大のための省力化を迫られて有機栽培をやめる判断をしたり、有機栽培農産物を販売してきた庄内協同ファームとしては試練の時期が来ていると思いました。午後には新しい生きもの調査について船橋さんの講演があり、ここにこれからの有機農業の希望の一つがあるように感じました。生きもの調査を通して自分たちの農業の価値を可視化して、消費者の皆さんや子ども達、実践している自分達も大切さや魅力を実感できるようにしたいです。確かに手間はかかりますが、田んぼに入って五感を使い、楽しみながら生きものや食べもののことを考える貴重な機会になるはずです。

memo

船橋 玲二（フナバシ レイジ）

「特定非営利活動法人 田んぼ」理事長。ふゆみずたんぼが生物を豊かにする効果、有機農法技術としての効果、自然共生農業の技術開発、田んぼから得られる食や暮らしを土台とした地域作りや、風土の再生について、農家、都市住民、行政、研究者、企業、NPOの方々と一緒に取り組んでいる。



春を探して

編集部が見つけた春の一枚



#春キャベツ煮込み
中華風あんかけ



忠鉢徳弘さん
水稲農家



#柿の芽吹きと剪定作業



對馬啓太さん
柿・水稲農家



#ヨモギのパンケーキ



高橋紀子さん
ラズベリー栽培
ジャム加工

